

近代デンマーク社会にみるシュレースヴィヒの表象をめぐる世代間コンフリクト

奥山裕介（文学研究科ドイツ文学）

■ 調査の背景・目的

報告者は、デンマークとドイツの境域であるシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン両公爵領の帰属を巡って争われた第2次シュレースヴィヒ戦争（1864-65）以後のデンマーク文学テキストに着目し、ユラン（ユトランド）地方のローカル・イメージとナショナル・アイデンティティの関係を検討してきた。

1840-50年代生まれの作家によって担われた1870-80年代のリアリズム文学では、幼年期に経験した敗戦の記憶をモチーフとする例が多く認められる。そこでは、ユラン半島が旧来付与されてきた〈不毛〉〈荒涼〉のイメージと敗戦の記憶を関連づける傾向が認められる。たとえば、ヘアマン・バング Herman Bang（1857-1912）は小説『化粧漆喰』*Stuk*（1887）で、コペンハーゲンの娯楽施設の描写をユラン地方の荒野・泥土と対照させ、敗戦の記憶が戦後世代のアイデンティティに及ぼす隠然たる影響を示唆している。

いっぽう、シュレースヴィヒ割譲後に生まれ敗戦を経験しなかったヨハネス・V・イェンズン Johannes V. Jensen（1873-1950）ら1860-70年代生まれの作家には、シュレースヴィヒ戦争への想起を捨象しながら、前世代より明確かつ詳細にユラン地方の特色を強調する傾向が認められる。彼らは、近代都市生活にみられる頹廢や不安を批判的に取り上げ、その対極に位置する民族的故郷としてユランを理想化している。バング世代もイェンズン世代も、ユラン地方の表象を通じて首都の文化を批判する点で一致しているが、後者の脱歴史的傾向は、シュレースヴィヒ喪失の社会的意義を重視するバングの批判を招いた。

シュレースヴィヒ喪失以後、ユランに関する地誌研究が盛んに発表され、首都に対するカウンター・パートとしてのユランの独自性を主張するローカリズム勃興の契機となった。今回の調査では、ユランのイメージをめぐる世代間の対立が、文学表象のみならず社会一般の言説に反映されていたことを示す例証を、文学テキスト以外の史資料に求めた。

■ 調査の概要

- ① コペンハーゲン王立図書館（2月26日～3月13日）…王立図書館データベースのトポグラフィー・インデックスを利用し、『イラスト新聞』*Illustreret Tidende* と『祖国』*Fædrelandet* の2紙から、首都の娯楽施設とシュレースヴィヒのイメージ上の対立関係を示唆する記事を抽出した。
- ② 南部ユラン文書館（3月14日～3月24日）…『ユラン歴史地誌論集』*Samlinger til jydsk Historie og Topografi*（1900-08, Original: 1866）と『南部ユラン年鑑』*Sønderjydske Aarbøger*（1889-）といったシュレースヴィヒ喪失を契機に発刊された雑誌から、ユランのローカル・イメージの歴史的変遷を扱った記事を抽出した。

■ 調査結果

① 【娯楽文化とシュレースヴィヒ危機】

『祖国』1843年9月1日号から、オリエンタルな外観で装われた遊園地ティヴォリ Tivoli が8月15日の開園いらい殷賑を極め、シュレースヴィヒ係争問題に関する市民の議論が沈静化していることを指摘する記事を発見した。また、『イラスト新聞』1884年6月29日号において、南部ユランの民族衣装を纏った少女団がティヴォリの建国記念イベントに招待されたことを報じる記事を確認した。このイベントは、失われたシュレースヴィヒのデンマークへの帰属性を首都の市民に向けて主張するデモンストレーションとして理解できる。これらの事実は、都市の娯楽文化の興隆を領土問題への意識低下のメルクマールとみる言説が、シュレースヴィヒ戦争以前の都市社会に存在していたことを例証するものである。

② 【シュレースヴィヒ喪失とユラン・ローカリズム】

『ユラン歴史地誌論集』に掲載されているヒース農業やユラン方言調査に関する記事が、ニルス・ブリガ Niels Blicher (1748-1839) の『ヴィーオム教区地誌』*Topographie over Vium Præstekald* (1795) など、シュレースヴィヒ戦争以前の地誌研究を参照しながら書かれたものであることが確認された。また、ミュールウス・イーレクスン Mylius Erichsen の『ユランのヒース今昔』*Den jyske Hede før og nu* (1903) やイエペ・オーケア Jeppe Aakjær の連続講演『ユラン的なものをめぐって』*Omkring det Jyske* (1904-17) など、シュレースヴィヒ割譲後のヒース開墾事業への批判を含んだテキストは、スティーン・スティーンスン・ブリガ Steen Steensen Blicher (1782-1848) のユラン地方に関するテキストに多分に依拠していることがわかった。これらの事実から、シュレースヴィヒ戦争以前に発表されたユラン地方に関する地誌的記述の再評価が、モダニズム期のユラン運動 *Den jyske Bevægelse* の一動因をなしている可能性が窺われる。

■ 研究の到達状況と今後の検討課題

都市空間を媒介とするバングのシュレースヴィヒ表象は、19世紀前半から続くコペンハーゲンとユラン地方の対立関係に依拠している。同様に、モダニズム世代によるユランの風土に直接依拠した記述も、シュレースヴィヒ戦争を契機に19世紀前半のユラン地方研究を積極的に評価・継承する動きが高まったことを反映するものといえる。これらのことから、デンマークにおける首都と地方の分裂状況は、1790年代から1840年代の初期ロマン主義時代に遡って検討される必要がある。当時は、ドイツ系官僚によって国家経営の中樞が担われていた啓蒙時代から、デンマーク民族の独自性を唱導するナショナリズム勃興への過渡期にあたり、ユラン地方の風土に民族精神の原風景を求める言説が広く流布した。シュレースヴィヒ戦争での敗北は、デンマーク・ナショナリズムの参照点がユラン地方からコペンハーゲンの都市空間へ移る契機をなしている。バング世代とイェンスン世代のコンフリクトは、コペンハーゲンによって独占的に担われたナショナル・アイデンティティが相対化され、ふたたびユランに回帰する過程を物語っているとの仮説が導かれる。